

villosae, squamae interiores apice ecorniculatae nigro-purpurascentes. Corolla flava marginalis 2 cm. longae subtus late striatae, pars tubi 4.5 mm. longa. Achenia straminea angusta 3.5 mm. longa 1 mm. lata, basi sensim contracta sulcata, apice patente spinuloso-tuberculata in cuspidem $\frac{1}{2}$ mm. longam sensim abientia, rostrum 1 mm. longum. Pappus sordide albus 6-7 mm longus.

Hab. Manshuria: Bujun, Higashi-koen (22 mai 1933 J. SATO)-Typus. Korea: Prov. Kogen: mt. Kongo (10 jun. 1932 J. OHWI).

樺太の *Taraxacum Otagirianum* KOIDZUMI に近い種類である。DAHLSTEDT 氏の *Taraxacum platyepidum* は果實が未だ記載されておらず、總苞片の様子はこれに似てゐる。然し葉の先端の形はちがふし D. 氏が *Calanthodia* に入れておるので果實は全く異なるかもしれぬ。

No. 3495 *Taraxacum mongolicum* HAND.-MAZZ.

新京公園

No. 3497 *Taraxacum Ohwianum* KITAMURA

奉天北陵

No. 2572 *Taraxacum sinicum* KITAGAWA

突泉

これは可成り分布の廣いもので始め *Taraxacum sinense* Dahlst. として Dahlstedt 氏が書いたが其の時の分布はシベリア、ドーリア、蒙古、西藏、直隸、甘肅、四川、雲南にあり北川政夫氏はこの名稱が既に他のものにある爲め新名を選ばれ滿洲各地に産する事を明かにされたが、今度佐方敏男氏は朝鮮水原花山に採集された。尙加藤元助氏は歐里で採集された。

Hieracium hololeion 九州に産す

北 村 四 郎

西日本と滿鮮にのみ共通する種類は近來可成り續々と發見され、半島部と内地との嘗ての陸続きを推論せしむる一つの論據となるのであらう。

Hieracium hololeion MAXIM. はマクシモビッチ氏により Primitiae Florae Amurensis p. 182 にアムールの標品により記載された種類であるが、其の後朝鮮にも發見され中井博士はイトスキラン、チョウセンスキランと稱んで居られる。これはスキランに外形は似てゐるが總苞の外片が卵形で頭花の下にはスキランに見る様な披針形の小苞を澤山に有しないのでよく區別される。本年薩摩の土井美夫氏が同國勝目村の採集品を送られ、これを研究したところ同じものが肥後國阿蘇郡内牧村千町無田にて大正十一年十月十日 田代善太郎氏が採集され其の標品が京大に入つてゐる。尙市川壽氏が岡崎市稻熊にて大正四年八月十日 採集された標品があるが、これが野生

May, 1935.

105

か栽培に関係があるのかは筆者は知り得ない。イトスキランが九州に産することは確かで植物分布上一寸面白いと思ふ。菊科のこの型の分布をせる著しく目立つものは、*Chrysanthemum sibiricum*, *Aster Maackii*, *Aster tataricus*, *Artemisia stolonifera*, *Artemisia rebripes*, *Senecio argunensis*, *Senecis longe-ligulatus*, *Saussurea gracilis*, *Saussurea Maximowiczii*, *Saussurea ussuriensis*, *Achillea ptarmicoides*, *Syneilesis palmata* で山地の植物である。もつとも *Chrysanthemum sibiricum* は海岸にもあるが。

抄 録

故ジョン ブリツケー氏：——1930年ケンブリッジ萬國植物會議に於て修正されたる 萬國植物命名規則 (John BRIQUET (+):——International Rules of Botanical Nomenclature revised by the International Botanical Congress of Cambridge, 1930年——Jena (1935)).

1930年に英國ケンブリッジに於ける萬國植物會議の結果修正されたる萬國植物命名規則はジョン ブリツケー氏の死により A. B. RENDLE 氏が英文の規則を書いて Journ. of Botany LXXII June, 1934 の Supplement p.p. 1—29 に出したが今度英文に佛譯、獨譯を加へ屬の保留名の表、園藝植物の命名、提案されたる屬の保留名、リンネ氏の屬名の提案されたる標準種、顯花植物の保留屬名の提案されたる標準種、及び佛文の Index を附して Jena の GUSTAV FISCHER より出版された。これは本年度 1935 年の Amsterdam 會議の爲めに出されたものである。

1910年のブラッセル會議の萬國植物命名規則は 中井猛之進博士が 岩波講座生物學「植物命名規則に就いて」(昭和五年六月)に譯記して居られる。ケンブリッジ會議については早田文藏博士が植物學雜誌四十五卷(1931) p. 73. に其の主要なる修正につき報じて居られる。今度の修正の命名規則はブラッセル會議の規則と多少條文も用語も條文の順序も變つてゐるところあり從來のものにない條文も加つてゐるので、無論小生の如き經驗知識なき若輩のなし得るところではないし、そしてこれは専門家の何にかの役に立つつもりで抄録するのではないが、地方に植物を研究される方々で手近に條文を見る事の出來ぬ會員の爲めに譯述し本誌に連載する。譯述には主文なる英語より比較的直譯したが英文の曖昧なところには佛文の直譯を附した、通じて英、佛、兩文を参照し、中井猛之進博士のブラッセル會議規則を指針とし、用語の譯もこれに従つた謹んで敬意を表する。尙筆者は將來經驗豊富、學識高き本邦分類學者の萬國植物命名規則日本文とこれの條文に對して親切なる註釋を附し一般分類學者の指針たらしめられんことを熱望する。(北村四郎)